〈研究ノート〉

日本型システムと電子的コミュニケーション
― 第3部　日本の中の日本との本音の対話 ―

The Japanese System and Electronic Communication
: Part III True Intentions of The Japanese System

栗　原　宏　文
Hirofumi Kurihara

Abstract : The so called japanese system is the system on which organizational behavior of most japanese are based. True intentions of the japanese system were discovered through electronic dialog, with students and others, on the japanese system itself. This paper concludes that most of educational systems in Japan are just oriented to enforce the japanese system itself.

もくじ

はじめに
1　愛媛県は日本の中の日本
2　言葉を発しなければ何も変わっていかない
3　善意で誠実に働いた結果
4　背中に翼をもっているような
5　とても信じ難く、想像したくもなかった
まとめ
謝　辞

はじめに

「日本型システムと電子的コミュニケーション－学生の心を開く一つの試み－」（愛媛経済論集第18巻第2号 pp.1－27）は、「日本型システムの終焉」（上田紀行著）の中での「愛媛の学生はほとんど死んでいるように見える」という問題指摘を中心に、愛媛大学法文学部総合政策学科の「組織コミュニケーション論」授業用電子会議室で、学生との電子的コミュニケーションを試み、このことが「学生の心を開く」のにどのように有効であったかを論じたものである。今回はその続きとして、更に、学生あるいは学外の教員や知人達と電子的コミュニケーションを試みて得られた結果を述べる。

まず1で「日本型システムの終焉」に関する対話の続きから「愛媛の県民性は明らかに存在する」ことを明らかにし、2では、「日本型システムと電子的コミュニケーション－学生の心を開く一つの試み－」へ寄せられた感想から「日本の中の日本に該当するかしないかの尺度」を提起する。次に3では、日本型システムの基礎を支えていると思われる「日本の教育システムへの問題指摘」に関する対話から「日本の教育システムが是正されるだろうとは誰も信じていない」ことを明らかにする。

転じて、4では「日本型システムと正反対のような若者」に関する対話から「日本の中の日本に満足せず、そこから飛び出したいという願望を諦めさせ、自信を奪い去るものこそまさしく日本型システムである」ことを明らかにし、最後に、5では「アメリカの教育システム」に関する対話から「日本の教育システムは学生に自信を植え付けることにではなく、自信を失わせることにこそ貢献している」ことを明らかにする。

1　愛媛県は日本の中の日本

まず、「日本型システムの終焉」（上田紀行著）に関して、学生、教員および知人に感想を求めたところ、次のような感想が寄せられた。

1.1　愛媛からは出なあかんぞ（ゼミ4回生）

「「愛媛からは出なあかんぞ。」私が高校時代に自分の進路を決める際、京都の大学に通う兄から耳にタコが出来るくらい言われ続けた言葉である。松山で生まれ育った私は、自分の周りの環境に何の疑問も持っておらず、松山に帰省するたびに自分の故郷を批判する兄の気持ちは不可解以外の何物でもなかった。こっちの学生なら、自分から将来の自分について熱く語るなんてことは絶対と言って良いほどないのだが、兄の周りの人達にはそんなことは当然なのである。そしてそれらの人々はただ夢見ているだけでは無くそれに向けて最大限の努力をしているのである。彼らを見ていると「愛媛の学生は死んでいるように見える」と言った上田氏の気持ちは痛いほど良く理解できる。」

1.2　自己主張における国民性の違い（ゼミ4回生）

「私は今年（1998）の8月に中国に行ってきた。今回の旅行でいかに日本人が自己主張の少ない人間か痛感した。中国人の主張のすごいことすごいこと。それは交通事情にも反映していて、中国の道路はクラクションの鳴りっぱなしである。自動車、自転車、歩行者のそれぞれが譲り合いという精神が欠けていて、日本人の私が見ていて冷や冷やものである。それがまた買い物となったら戦争である。また、何かのトラブルが発生した時にも自己主張における国民性の違いを実感できる。何も言えない国日本、その中でもさらに自己主張の弱いと思われる愛媛県で生まれ育った私にとってはなおさらである。」

1.3　環境に満足し適応してしまった（ゼミ4回生）

「大学が、自分の期待していたような活気ある場所ではなかったというのは、悲しいけれど仕方のないことだと思います。問題は、おかしいと思っていても、それを変えることをたやすくあきらめてその環境に満足し適応してしまったことにあると思います。それにしても、ここまで「愛媛の悪口」を書いた文章に私がひどく腹が立つのは、おそらく図星だからだと思います。この本は、私にとってはためになったと心から思います。愛媛をより良くするためには、耳の痛い話でも耳をふさがずに聞き入れながら、私たち自身が動かなければならないのだと思います。」

1.4　個性の弱さ（ゼミ4回生）

「その理由は彼らの個性の弱さにあると思う。とにかく”変人”が少ない。”変人”という言葉は意味的には良い意味ではないが、逆を言えば強い個性の裏返しであり、すばらしいことだし、誉め言葉だと思う。僕が思う”変人”の基準は、自分でも抽象的で上手く言えないのだが、とにかく僕が愛媛で出会った人たちの言葉や行動はあまり魅力が感じられなかった。愛媛での一年目は県外出身の友達とよく愚痴を言っていたものだ。彼らは物事に対しての切り口があまりにも平凡だと思う。」

1.5　縁故採用（ゼミ4回生）

「これまでの就職活動を通して、愛媛では縁故採用の企業がまだまだ多いということを身を持って実感した。人物重視としながらも自己紹介書の中に、当社の知人の名前や、誰の紹介で当社を受験したのかといった質問がされ、不快な思いをすることが現実にあったのである。コネを使って採用された人がまたコネを使って採用すれば、結局いつまでたっても縁故採用はなくならない。県の中枢とも言える県庁や市役所などが、その可能性は大きいが、コネでその地位を得た人たちの集まりだとしたら、これからの愛媛は本当に暗いものになってしまうと思う。」

1.6　人材は育ちにくい環境（ゼミ4回生）

「私は今年就職活動をしました。この厳しい就

職難の中では面接で自分にしかない特徴を出しアピールしなければなりませんでした。でも、いくら考えても自分だけの特徴が見つかりませんでした。なぜなのか大変迷いましたが、少し納得させられたような気がします。企業では、積極的で創造性があり、自分だけの特徴を持った人材を求めるところが増加しています。確かに今の愛媛や香川の教育ではそういう人材は育ちにくい環境にあるかもしれません。この部分は素直に受けとめた方がいいと思います。」

1.7　今のシステムで恩恵をうけている人（1998年度修士１年生）

「正直にいって、自分の意見を言わないというのは、日本人全体の今の特徴だと思っていたので、少しショックでした。確かに、指摘されていることは、そのとうりかもしれないと思えて、少し怖くなりました。おそらく、今の愛媛のシステムで恩恵をうけている人が、多いために保守的な土壌になってしまったのでしょうね。実際、私の父も県の職員でしたし、叔父は市役所・農協・・・・。けっこう　そういう状況の人がほとんどではないでしょうか。企業も寡占状態ですから、同じような状況ですよね。」

1.8　愛媛県は日本の中の日本（松山の教員）

「日本人から人材が育って居ないのはこの国にシステム的原因があるのですね。数年前、毎日新聞社から出ましたウォルフレンの「人間を幸福にしない日本というシステム」での記述の通りですから、個人が幸せを追求すると、とても酷い嫉妬や得体の知れない暗黙の了解とか指導によって、つぶされてしまうからではないでしょうか。

この結果としていろいろな弊害が出てきますが、思いつくままにあげると、

1　個性が育たず、欧米の基準からは死んでいるように見える
2　起業家には成功すれば、揶揄と嫉妬が待ちかまえている
3　失敗した機関のトップは二度と立ち上がれないほど否定される
4　結果的に新規産業は全く興り得ないので国力が低下する
5　創造性から生まれる知的成果がタダだと曲解（意図的？）される
6　周りとぶつからず何もしないことが最善のライフスタイルとなる
7　良いことをしようとする才能のあるものほど苦しむことになる
8　そこに所属する者は優秀な順に外へエスケープせざるを得ない
9　日本システムの事務手法では過去と同じ延長上にないと認めないので研究者は常に矛盾に晒されて言いようのないストレスを浴びる。まだまだありますが、切りがないので止めます。こうやって見てみると、愛媛県は、日本の中の日本ですね！」

1.9　周りとぶつからないのは「最大の美徳」（松山の知人）

「でも、実際にサラリーマンのことを考えると、周りとぶつからず何もしなければ結構居心地が良くて長年勤められると思います。この不況でちょっと状況が変わっているかも知れませんが。自分一人ならまだしも、家族を養うことを考えれば、周りとぶつからないのは「最大の美徳」のような気がします。日本の企業自体がそういう風潮を作り上げているんだと思います。だから、純日本的な企業にとっては、たいていの愛大生は歓迎されるのでは…。ただし、才能がないということではなくて、ぶつからないように生きていく技術を充分に身につけているという解釈です。」

ここで紹介した就職活動中の学生や社会人からの感想は「愛媛の県民性は明らかに存在する」ということの証言と看做しても良いと思う。次に、このことを「日本型システムと電子的コミュニケーション－学生の心を開く一つの試み－」で詳しく紹介した愛大生の特質に結び付けて考えると、「上田氏が指摘した愛大生の特質は、愛媛の県民性と切り離せないものである」ということも蓋然性があると思う。また、これらのことから、逆に

「上田氏が指摘した愛大生の特質は明らかに存在する」ということも導かれると思う。

2　言葉を発しなければ何も変わっていかない

次に、「日本型システムと電子的コミュニケーションー学生の心を開く一つの試みー」（注：「日本型システムの終焉」の中での「愛媛の学生はほとんど死んでいるように見える」という問題指摘を中心に、「組織コミュニケーション論」授業用電子会議室で、学生との電子的コミュニケーションを試みたもの）に関して、学生、教員および知人に感想を求めたところ、次のような感想が寄せられた。

2.1　意見を言った振りになってる（4回生）

「日本社会への責任転嫁や、教育制度への批判というのは、結局誰にでもできること、一番やり易い批判の矛先だと思います。手の届かないような大きな対象を持ってきて、これが悪いからいけないのだ、私にはどうしようもできない、といった図式になってしまっては、はなから考える気がないというか、意見を言った振りになってるものです。語ったつもりが実は黙っていた、というところ。みんなの結論は、ああした方がいい、こうした方がいいと、言葉の上では、正論は多く見受けられますが、それが実際のBBS（学科が運営している電子掲示板）上で少しでも出てくるかどうか、むずかしいかも。」

2.2　常に周囲をうかがってしまう（ゼミ4回生）

「自分の望むことは自らが求めなければ得られない」確かにこの通りだと思います。以前から頭では分かっていたことですが、最近になってようやく行動に移すことが少しずつですが出来るようになってきました。上記の先生の言葉を実行するのにいつも躊躇してしまう理由の一つに、自分が求めることによって、自分以外の誰か（何か）に対して不快感や迷惑を感じさせてしまう可能性があるのではないかという危惧があります。常に周囲をうかがってしまう自分はまだまだ根っからの伊予っ子なんでしょうか？（笑）」

2.3　自己の改革への意識はまるで感じられません（4回生）

「正直な話、学校外で様々な勉強をさせていただきました。更にいうと、社会的立場を保証された上での、自由な時間を買いに来ただけです。言葉で表現すると、日本型システムの崩壊を肌で感じたからでしょうか。（中略）　就職面接中の会話にしても、良く思われたい一心の人ばかりなのですから、マイナスになるようなことは発言しませんし、そのような人の前では、格好をつけてもメッキはすぐにはがれます。このような人々が、今の教育や日本型システムといったところで、結局は他のせいにしているだけで、本来必要と思われる自己の改革への意識はまるで感じられません。」

2.4　意思の疎通によって得られる質の高い知識の享受（3回生）

「制度疲労の生徒が、大学に来て、いざ新たに勉強をしようとしても目的意識を失い「意見を持たない学生」を作り出しているというのもある意味で既成の事実です。その意見を持たない学生が、BBSの会議室を介して、自分達（学生達）の意見を電子メールで送り、この意見を持たない学生に対しての反論や批判やその他数々の意見が飛び交いました。その結果、教える側と教えられる側との間で、一方的な知識の享受ではなく、両者の互いの意思の疎通によって得られる質の高い知識の享受が行われました。」

2.5　話を聞いて理解するという訓練が欠けている（3回生）

「どうも日本人の議論は建設的でないように思えます。様々な理由を挙げることができますが、ここではもっとも気になっているものを挙げておきます。それは、人の話を聞いて理解するという訓練が欠けているのは問題ではないだろうか、と

いうことです。少人数の授業などで意見を求められて誰々さんと一緒です、というのは珍しくない答えです。そこで同じでいいからいって見てください、と言われると途端につまったりかなり異なった意見を述べたりします。要するに人の意見をなんとなく聞いているのです。日常生活の中でならともかく意見を交換することを目的としている授業のなかでこのような光景が見られるのはなかなか不可思議な現象だと思います。」

2.6 ただ「こなす」ことが出来ない講義（教育学部１回生）

「この講義（注：共通教育科目の「社会と個人」副題：電子コミュニケーション論入門）は他の講義とはかなり違います。ただ「こなす」だけの講義に慣れている僕たち愛大生にとっては、悪く言うと、めんどくさい講義です。しかし「組織コミュニケーション論」に関するメールを読んで考えが変わりました。BBS と電子メールの違いはあるもののこの講義と「組織コミュニケーション論」は同じような授業形態を取っていると思います。双方ともただ「こなす」ことが出来ない講義です。」

2.7 引きずりおろそうとする傾向（工学部２回生）

「一つの意見にまとめられてしまう環境、これが「考えない人」を生み出しているのではないだろうか。意見を持っているのにそれを主張させない環境もまた「考えない人」を生み出している一因だろう。独自な感性を持っているにもかかわらずそれを現さないのが得、という雰囲気が根付いているのが日本の風潮なのだろう。（中略）　四国三県は総理を輩出してますが、愛媛だけ輩出してませんねえ。歴史で出てきた人物って、想像できます？　愛媛の人は、飛び出た才能のある人のバックアップをすることはおろか、引きずりおろそうとする傾向があるようです。（中略）　あるところで聞いた噂では、大学の先生が愛媛県の教育批判の話題を公にすると、その年はその大学出身者の教職員を採用しないとか何とか。」

2.8 自分の考えを伝達する能力が乏しい（人文学科３回生）

「この文章にある「組織コミュニケーション論」並びに「情報技術とコミュニケーション」（注：1999年度前期の授業）の授業がとても新鮮に思える。なぜなら、BBS を目的としてではなく手段として扱っているからだ。現在の大学の講義は、手段にすぎないものを目的として行われているものが多いと思う。（中略）　物事をいくら知っていても、それに対する自分の考えを他人に伝達できないと、進歩の観点からすれば、それは知っていないのと同じである。上田紀行氏の愛大生批判は、愛大生が自分の考えを伝達する能力が乏しいということを意味しているのではないかと思った。」

2.9 所詮自分の問題としてとらえてない（４回生）

「意見を持つということは、一定以上の知識と問題意識を持って物事を見ることによって可能になるのだと考えています。そして、他者と議論を戦わせることによってその主張を変化させたり、あるいは磨いていくものであるといえるでしょう。ところが、他者と議論をしないことがあたかも正しいことであるかのように主張している方々がいるのには、あ然としました。これらの批判あるいは警告に対して日本全体や教育システムの問題としている方々も多くいたようですが所詮自分の問題としてとらえてないだけなのかもしれないです。」

2.10 「真面目」な事を発表する場が欠けて（1999年度修士１年生）

「今の日本にはいわゆる「真面目」な事を発表する場が欠けていたり、そういうことを言う雰囲気が作られていない様な気がします。そのことが原因で、「意見を持っているのに言えない」情けない学生が増えているように思います。上田先生は、そういう場に自分で出かけて行くこと。見つからなければ、自分で創り出す事を愛大生に求めていたと思います。」

2.11　反応が強すぎる（1999年度修士1年生）

「全体的に強く受けた印象がある。それは「反応が強すぎる」というものである。今までの自分に対して何らかの反省をしているものが多いが、中には、今までの自分の否定とも受け取れる文章も見て取れ、ここまで深刻に受け止める学生がこれほどまでに多いとは正直なところ、予想の範囲を超えていたため驚きの念を禁じ得ない。上田氏の指摘に対する反論も数多くあるが、このような強烈な反応が出たということは、上田氏の指摘が的を得ていた部分もやはりあるのだろう。」

2.12　自分に対しては全く素直ではない（1999年度修士1年生）

「県内の企業が，素直な大学生を求めているという話があったが，この素直な学生とは，自分の願望を押し殺して，他と合わせているのだから，自分に対しては全く素直ではない。自分の価値というものは，自分のやりたいことを見つけて取り組んでいくことだろうが，個人レベルにおいても自分のやりたいことに取り組まない「兵隊アリ」なら事態は深刻である。他者と意見をぶつけていくことで，自分が鍛えられるし，他者とのやりとりが成立するためには自分が信念を持ち，自分の判断基準を持たねばならない。」

2.13　構造の課題（東京の教員）

「BBS を立ちあげてそこで議論を行うという「形式」と、「日本型システム」を題材に論じるという「内容」が、シンクロしていたのだなあと感慨をもちました。また、栗原先生が「自分の意見を持たない」というところを取り出して課題にされたのも、実に的確だったのだと感嘆。「君たちは自分の意見を持っていない」という意見について、君たちの意見を述べよ。という構造の課題であり、BBS に書き連ねられた「意見」から、それが果たして「意見」になっているのか、BBS 以外のところでは「意見」が言えるのか、といった進展が試みられているわけですから。それに、この課題が自分たちについての評価に対するものでなければ、反発を含め、ここまで関心を呼び起こさなかったことでしょうから、栗原先生はやはりかなりの曲者(笑)だとあらためて認識いたしました。」

2.14　言葉を発しなければ何も変わっていかない（東京の教員）

「上意下達以心伝心的日本型システムに浸かりきっていた学生たちが、言葉を発しなければ何も変わっていかないことに気づくまでのドキュメンタリー・ドラマとして興味深く読みました。もちろん、ただたんに言葉を発するだけではだめで、状況を考えたうえでの言葉の選択やその言葉をいかに効率的に共有するかという問題もあり、後半、栗原先生が学生たちをより高い水準に引き上げるための苦労を記した部分がありましたが、半年の授業（しかも新開講）では満足できる成果があったように思います。学生たちに、ただたんに言葉を発するだけの悪い見本として学科会議や教授会議のビデオでも見せたいところですが、絶対に許可されないでしょう。」

2.15　一挙に変革する可能性(東京の教員)

「教育実践という意味でも素晴らしいものだと思いますが、それ以上に、コンピュータコミュニケーションというものの可能性について、愛媛の県民性というものと絡めて、これまでにない発想で論述されたものだと思います。コンピュータ・コミュニケーションのグローバル性は、声高に議論されることがあっても、じつはそんなところにメリットがあるのではなくて、今この瞬間にも逃れることのできない人間関係の持つ意味を、生産的な方向で一挙に変革する可能性があることを示していると思いました。上田氏が、逃げるようにして「愛媛」を離れたばかりではなく、愛媛を罵倒する（ととらえるかどうかは別ですが）ことで自己の業績を確実にあげたわけですが、この栗原論文は、上田氏の主張の正しさを実践という形で、学生たちに知らせたという意味で大変な意味のあるものだと思いました。」

2.16 オンラインでコミュニケーションをとるのがいい（青森の教員）

「たしかに、今の学生は、数人集まって話すとか議論するとかが、ほんと下手くそで、まずゼミが成り立たないのですね。ところが、私と1対1になると、あれこれ話しをし、長時間でも話したいようです。どうやら、心のなかは、学生は淋しがりやでもあるようですね。オンラインでコミュニケーションをとるのが、いいのかもしれませんね。私のほうも、メールで1対1で行っているのですが、20人近くになるとやはり大変です。1対1なので、私しか読みませんので、学生にとっては安心してメールが送れるようですが、お守り役の当方が毎日返事を書いており、時間とエネルギーをかなりさかれております。それに、学生にとっては他人の意見をともかく聞くとか、質問するとかができない欠点があります。」

2.17 無気力を解決（和歌山の教員）

「上田氏に対する学生の態度の変化、段々自分の意見を述べるようになっていく様子などは感動的でさえありました。その間の先生の適切な対応、指導力には感服致しました。愛媛大学の熱血先生という感じです。先生のエネルギーも大変だったとご推察申し上げます。上田氏の指摘は正に和大生にもぴったりです。なにも愛媛大学だけではなく、あるいは全国至る所に見られることでないでしょうか。先生の実験を拝見して、ひょっとすれば和大生の無気力を解決することができるかなと感じはじめています。」

ここで紹介した感想は、「日本型システムと電子的コミュニケーション－学生の心を開く一つの試み－」という論文に関心を持った人からのものなので、どちらかというと、「日本の中の日本」に該当しない人が多い。これらから「日本の中の日本に該当するかしないかの尺度は「言葉を発しなければ何も変わっていかない」という信念が強いかどうか、自己の改革への意識が強いかどうか、自分に対して素直かどうかなどがあげられる」ということが分かる。

3 善意で誠実に働いた結果

次に、日本型システムの基礎を支えていると思われる「日本の教育システムへの問題指摘」に関する話を紹介する。1998年の秋頃、元会社の同僚で今は経営コンサルタントとして活躍している都村長生君に会い、彼の著作「なんしょんな香川 全3巻」（株式会社ホットカプセル、香川県高松市）を寄贈された。その第3巻目、「なんしょんな香川 Part III 都村長生の最終提言」は、日本の教育システムへの問題指摘が中心課題でした。これは1と2で取り上げた二つの対話用素材に続くものと直感した私は早速、その内容を次のように要約した。

［学校教育の危機、崩壊する家庭教育］

（なんしょんな香川 PartⅢ 都村長生の最終提言）

はじめに

・文部省が教育産業を独占したために日本の教育現場が荒廃し、国の成長の芽が摘まれた。

序　章

・戦後50年間の歪が各所に噴き出しているので、一つ何か直したらうまくいくという話ではなく、ポーカーで言うと「総替え」が必要な状況。
・今までの文部省主導の教育システムを延長して、微調整を施すくらいの教育改革をしてみてもまったく効果が期待できない。
・文部省の規制のために学校教育産業に自由に参入できない。結果、教育を受ける人は選択肢が全くなくなっている。

第1章 学校教育の危機

1 文部省主導による価値観の画一化

・多様化の時代に合わなくなった教育システム
・「落ちこぼれ」という名の死刑宣告
・オウム真理教と文部省、画一化された価値観を操る者

・文部省は、大学のお金と人事を押さえている
・誰も入れない大学ビジネス：新しい学科の設置も許認可事項。
・教育も民営化すべき：地域ベースで教育を民営化するしかない

2　日本に大学教育は存在しない

・末期的な私立大学の経営：授業料はもう限界
・悲惨な大学教員の質：競争がない世界、教育に力を入れない、ビジネスの経験もない経営学教員。
・大学は〝大卒免許の発行所〟：単なる肩書きを得るための通過点としか評価されていない、親も期待していない。
・産業界からも見捨てられた日本の大学：金を出さないのも当然。
・日本に大学はない：「日本には大学という教育・研究機関はない」ことは、民間企業も親も知っている。みんなで暗黙のうちに合意している。
・まとめ：文部省が戦後、護送船団方式のものすごい規制社会をつくった。その頂点に立つ大学を徹底的に管理し、思うままに操ることに成功した。誰も参入できない。競争原理が全く働かない。その中から、狙い通り画一的な価値観をもつ人間だけが生まれてくる。管理には大成功したが、結果、皮肉なことに日本には「大学教育」はなくなってしまった。

3　壊滅する中学校

・「答教えて症候群（シンドローム）」：最近の受験では、制限時間内に「答」にたどり着くためには、考えてはいけない。ひたすら教わったことを条件反射的にこなし、あらかじめ教わった「答」に向かって突き進むしか方法がない。
・残念ながら、この症候群への即効性の治療方法はありません。なぜなら、この病は戦後50年かかってジワジワ進行した病気ですから、治すにも時間がかかるのです。
・「答教えて症候群」第1期：（昭和40年くらいまで）文部省の指示の下、学校の'先生が媒介'となって「答教えて症候群」ウイルスを全児童に蔓延させた。
・「答教えて症候群」第2期：第1期感染者が成長して母親となり、今は家庭の'母親が媒介'となってひたすらこのウイルスを子供にまき散らしつつある。つまり、ウイルスは学校に止まらず、家庭にまで感染してしまった。
・素直な子供ならともかく、いったん性根が固まってしまった大人（主として母親）の意識を変えることは、ほぼ不可能に近い。従って、まず今から生まれてくる子供の意識改革から始め、その子が親になった時、初めて効果が出てくる、そんな長期的な治療箋しか残されていない。これが、一般大多数の「体制順応タイプ」の生徒の最大の病根。
・小中高教育にはユーザーに教育サービスを選ぶ自由は全くありません。従って、競争原理も働かず、知育偏重の文部省の枠組みから落ちこぼれた者の反乱が相次いでいる。

第2章　崩壊する家庭教育

1　現代の魔女狩り

・母親が魔女狩りの使徒に：親が無意識のうちに加害者となってしまっている。画一化した価値観以外の考え方が現われると、無意識のうちに拒否してしまうまでに訓練されてしまっている。本来なら豊かな人間性を育むベースとなるべき家庭が、異端者をはじき出す'魔女狩り'の場と化して、一億総「勉強せんか」現象が起ってしまっている。
・本当に教育が必要なのは母親だ：文部省主導の画一的学校教育が、だんだん子供たちをおかしくしてきた。そして一世代めぐって育てられた画一の価値観を持った母親が、まさにそれに拍車をかけて走らせている。

2　家庭の役割か、学校の役割か

・世の中のみんなが手抜きしてやりたくないことを全部先生がやらされている。
・日本の家庭は社会のルールを教えない

第3章　的はずれの企業内教育

・上司も「答教えて症候群」に冒されている。

社長は一番重度の患者。行政もしかり。

・「答教えて症候群」第３期：全国の会社員にまで広がり、かくして「答教えて症候群」は日本社会の中枢をも冒してしまった。

あとがき

・私たちはみんな、「画一化された価値観がすでに自分にすり込まれている」という意識がない。当然、「自分が媒介になってそれを子供や部下にすり込んでいる」という意識もない。

・「なんしょんな香川　全３巻」は、その意識を回復する特効薬である。（第１巻は香川の行政問題　第２巻は香川の高齢者対策問題を論じたもの）

・子孫に荒廃した国と膨大な借金だけを残して遊んで逃げるか、無策を反省し、せめて正常な国を取り戻すための楔を打ち込んで子孫に託すか。

著者紹介：都村長生氏は香川県琴平町出身　丸亀高校を経て、1973年、東京大学工学部反応化学科修士課程卒業後、東亜燃料工業（株）に入社。1983年、米国ペンシルベニア大学ウォートン校経営大学院に留学、国際金融を専攻し、MBA（経営学修士）を取得する。その後、マッキンゼー・ジャパンを経て、経営コンサルタントとして独立。現在、高松市在住。（都村君は東亜燃料工業（株）にいた1975年頃、私、栗原の部下だったこともある。私は縁あって1998年10月２日、東京、恵比寿のウエスティン・ホテルで15年振りに再会した時、都村君から「なんしょんな香川　全３巻」を寄贈された。）

そして、この要約に関して、学生、教員および知人に感想を求めたところ、次のような感想が寄せられた。

3.1　本当にそんなことができるのだろうか（ゼミ３回生）

「現在の文部省主導の教育システムが、限界にきていることはわかる。しかし、意識改革を行うとしても、それを行う立場にあるのは「いったん性根が固まってしまった大人」であり、本当にそんなことができるのだろうかと感じる。」

3.2　現状に再度うんざり（３回生）

「日本の大学、引いては日本の教育がいかに画一化した教育を施しているかという現状に再度うんざりさせられました。そして、将来において日本の企業で仕事をしたり、公務員のように閉鎖的な環境で仕事をすることに大変疑問がでてきました。真剣に頑張って勉強する学生にとって、真剣に勉強をしない学生はとても気分を害したりして意味のない存在になるとも思います。」

3.3　残酷な母親も少なくありません（工学部２回生）

「今の日本には大学教育そのものが無くなっている、それ以前に、まず母親を教育しなければならないと書いてありますが、全くもってその通りだと感じます。子供の時に将来何かの役に立つからと言ってピアノ・習字・ダンス etc. を習わせる母親が多すぎるし、「お受験」とかいって小さい頃から勉強（答えを考えないでパターンから見つけだす方です）させている、残酷な母親も少なくありません。」

3.4　大学はただの過程であり目的ではない（教育学部１回生）

「なぜ僕が愛媛大学に入学したかというと、一つは僕を大学に入学させるのが母の目標だったからです。母子家庭ながらに（だからこそかもしれませんが）母は僕が大学へ入るため、僕が小さいときから貯金をしていました。（中略）要するに僕にとっても母にとっても大学は「大卒免許の発行所」なのです。ですから、大学に勉強をしにきている学生や、教授には悪いのですが、正直に言うと僕には大学が「大学」である必要はないのです。それどころか、楽な講義で楽に単位を取れるほうが、SE になるための勉強をする時間が増えていいぐらいに思っています。僕にとって大学はただの過程であり目的ではないのです。」

3.5　一体自分は何を学んだの？（3回生）

「就職活動を控えて心配なんです。「一体自分は何を学んだの？」って。例えば、私は経済を学びました。では経済の何を学んだの？経済の何を理解してるの？もう3回生も終わるというのに、ニュースを見ても本を読んでもまだまだ分からないことばかり。それならば、つまんない講義にでてぼーっと座って時間を潰してるよりも本や新聞を読んだほうがマシなんじゃないの？経済なんてのは実学ですから、戦場に出て実際に戦っている人たちこそが、その仕組みもノウハウも裏も一番よく知っているように思えます。」

3.6　昔から学校に興味がなかった（4回生）

「学校でも家庭でも、叱られながらも自分にとって価値のないことは、極力しないスタンスをとってきたため、その度に辛酸をなめる思いをしたこともあります。しかし、今ここにある自分を好きでいられるのも、自分の思うとおりにやれた結果だと思っています。多分、「昔から学校に興味がなかったのだな」と今になって感じました。」

3.7　人に判断してもらえるもの（3回生）

「学生の側から言えば、大学当局は卒業証書を出してくれればそれでいい、それ以上の期待はしない。というのが大多数の見方のような気がします。学科生の行動を理解するときに卒業に必要か否かはかなり影響力の大きい要素であると思います。次はやはり、資格という事でしょうか。教員になる気は全くないのにとりあえず教員免許を取るために実習にいって母校に嫌がられるものも多いと聞いています。主観的な価値判断ができず、人に判断してもらえるものに対する欲求がキーではないかな、と漠然と考えることがあります。」

3.8　大学とは一人で学ぶと書く（東京の教員）

「提示頂いた問題については小生も常々不満や危機感を持っています。小生が大学に入学したとき，入学式の祝辞で学長が「大学とは一人で学ぶと書く」（大という字は一と人との組み合わせです）と言われたのを今でも覚えており，学生にもそう言っています。つまり，本人に問題があれば大学に通わせても無駄であるということです。
大学は学生が勉強するための環境と情報を提供する場であると思っています。」

3.9　挑発的な本になりそう（東京の教員）

「栗原先生の周りには、独断的（ほめ言葉）パワフルな人が多いのですねえ。それも、今年の10月に再会して、香川の本をプレゼントされたというのだからあきれます。何という出会いの年なんだ！　香川も愛媛とノリがかなり近いのですよね。この要旨を読むだけで共感してしまう自分が怖い。これもまた学生には挑発的な本になりそうですね。」

3.10　善意で誠実に働いた結果だと思うと暗然とする（東京の知人）

「都村さんの教育（文部省）の意見を読みました。学校現場から、家庭、社会に時間的な波及が面白いと思います。大多数の文部官僚も母親も善意で誠実に働いた結果だと思うと暗然とします。自己確立ができずに安易に権威統制に寄りかかる日本人の奴隷根性（村社会意識）が根本の原因でしょう。自信喪失した、面倒なことを母親と学校に押し付けた父親・男の問題でしょう。大学の問題は大学人の危機意識が高まらないと難しいのでしょうね。」

ここで紹介した感想から「大学も含めて、現在の文部省主導の教育システムが、限界にきていることは皆、薄々感じてはいるが、それが是正されるだろうとは誰も信じていない」ということが良く分かる。また「日本の中の日本に該当するかしないかの尺度には、主観的な価値判断ができるかどうか、目的意識があるかどうか、自己確立ができているかどうか、も含まれる。」ということ、更に「日本の中の日本は、長年に渡って日本的な善意や誠実さが育んだもので、殆どの日本人の血

や肉になっている。」ということが良く分かる。

4　背中に翼をもっているような

以上、日本型システム（もしくは教育システム）を巡っての対話を紹介したが、ここでは転じて、日本型システムと正反対のような若者の話を紹介します。1998年の夏、帰省先の東京で、卒業生の一人、岩下英雄君と会いました。話を聞いてみると、彼は上田紀行先生の指摘には全く当てはまらない人物に思えたので、早速、彼のことを紹介する文を下記のように作りました。

[岩下英雄君について]

岩下英雄君は1995年度に私の夜間ゼミの３回生でした。1996年度は私の授業、情報管理論を取りました。1996年の５月頃だったか、岩下君が米国に留学したいと思っていると言うので、まず、英語に慣れることも狙って夏休みにホームスティに行くことを勧めました。すると、岩下君はそれまでの２年間にバイトで溜めた70万円をはたいて、２ケ月間のサマーコースでカリフォルニアの大学に行きました。この経験は彼の進む方向を決定的なものにしたようです。帰って来て、将来は米国でCG（コンピュータグラフィックス）や映像関係の仕事をしたいと言い出したのです。そこで、私は彼に、まず東京に出て、それに関連した企業や人脈を見つけ、米国に渡るキッカケを掴みなさいと助言しました。1997年３月に彼は卒業しました。私は時々東京に帰っているので、たまには連絡をしなさいと言っておきました。それ以後、約１年半、音さたがありませんでした。

ところが、つい最近になって、連絡がありました。やっと第１ステップが軌道に乗ったというのです。で、早速、話を聞かせなさいと言って、東京の大森のわが家に岩下君を呼んで、会ったのが、昨夜、８月13日でした。聞くところによると、岩下君は、誰一人として頼れる人のいない東京に出て来て、直ぐに池袋近辺のお風呂もついていない安アパートを借りて、初めは土管（に潜ってする）掃除の仕事、そして建築材の運搬の仕事、電気配線工事など３K的仕事を厭わず、遂に、７月頃、真面目な態度を買われて、ファッション企画の仕事を手にしたと言うのです。彼は、生まれたからには、後悔しないように、あらゆる可能性を追及してみるのだと言っていました。そう言えば、彼は決して秀才ではないし、英語も堪能ではないし、コンピュータに強い訳でもないし、名文が書ける訳でもないし、専門知識が豊富な訳でもない。ただ、彼にあるのは、自分への信頼と夢と実行力と快活さ、素直で前向きな態度である。

ファッション企画の仕事をバネに、米国に飛躍したいと豊富を述べていました。そして、米国に渡ったら、多分、日本には戻らないつもりだと言っていました。上田紀行さんの指摘に当てはまらない人がここにもいたな、と思いました。実家のある大分には卒業してから帰ったことがないので、今年の夏は、一度大分に帰り、その帰路に松山に寄って、1996年の夏に筋ジストロフィーで亡くなった友人、藤田君の墓をお参りしてくると言っていました。そう言えば、岩下君は障害者をケアするボランティア活動もやっていました。岩下君の生き方を皆さんはどう思いますか。（あ、上田紀行さんは文化人類学者です。スリランカの悪魔ばらいなど宗教的行事や癒しに詳しい方です。テレビにも良く出ています。）

そして、この紹介文に関して、学生、教員および知人に感想を求めたところ、次のような感想が寄せられた。

4.1　こんなすばらしいことはない（３回生）

「自分を心から信頼する、すごく難しいことだと思います。私も自分の可能性を信じたいのはやまやまなのですが、自分のおかれている環境を考えてみたり、世間一般の「常識」というものを考えたりすると、自分自身の可能性を少なめに見積もることで、レールからはずれない生き方を選んでしまっているような気がします。「夢」、昔はいろいろあったはずなのに今はもう思い出すことができません。自分を信頼し、夢に向かって頑張

る、こんなすばらしいことはないと思います。」

4.2　背中に翼をもっているような（3回生）

「彼はすごいなっておもいました。でも一体何が彼をそうさせるのでしょう。ただ夢のためだけに全てを捨ててゼロから生きられるものでしょうか。それとも私のものさしが狭すぎるのでしょうか。彼について読んだとき、彼が背中に翼をもっているような気がしました。大きな翼でどこまでも、本当にアメリカまでも飛んでいきそうです。彼には足枷はないのでしょうか。私には羽根がない。空を見上げるたびに、うらやましくてにらむ。いきたくてうらむ。あんなに広い空なのに、私だって空にいきたい。でも私は飛び方を知らないし、安住の地を捨て去ることができない。それでも、いつか私も心が自由になれるかしら。」

4.3　自分の才能に対する自信はない（ゼミ3回生）

「岩下君のような生き方をうらやましいとは思うが、自分には絶対にできない生き方だと思う。（中略）私の姉は、高校生の時に二科展に作品を出展するような人である。そういうふうな、確実に生まれつきの才能のある姉をずっと見てきたせいか、自分には、美術にしろ音楽にしろ、姉のような才能がないことを実感していたせいかもしれない。だから、私には自分の才能に対する自信はないし、自分の才能を試すような生き方はできないと思う。」

4.4　何倍も価値のある生活（工学部2回生）

「岩下さんの決断は、長い時間がかかるけど得られるものは非常に多く、普通にアメリカに渡って勉強するよりも何倍も価値のある生活を現在されていらっしゃいますね。実家のある大分のみならず、日本を捨ててアメリカで活躍するということはそうそう簡単なことではないでしょうが、岩下さんの活躍をお祈りします。」

4.5　学校の外で学んだ学問（4回生）

「今は様々な保護がなくなり、真の意味で競争社会になっているのは周知のとおりですが、これはチャンスもゴロゴロしているということで、今までのように何もしない者がのうのうと生きられる社会が終わり、働くものにはそれなりの報酬が約束されるといった、能力主義の資本主義経済が始まろうとしているのです。そして、それは無意味と知りつつも踏襲され続けていた学歴や地位を廃絶する、人道に沿った当然の社会に変わりつつあると思うのです。これは、私が学校の外で学んだ学問です。」

4.6　とても嫌気がさします（3回生）

「私は、いつも目先の目標に向かって努力しています。そのため岩下さんのような、目先の目標ではなく自分の信念と目標にひたすら努力を惜しまない人間というのはととてもすばらしいと思います。岩下さんのような人の生き方に対して、とても納得のいく選択だと思います。しかし、実際行動を起こすとなると話しは別なのです。多くのファクターが自分を拘束しています。それを飛び出して自分の信念や夢に基づいて生きていくのはとても多くの壁があり、苦労以上の苦労を強いられます。だから、今の環境で楽に暮らすということになる。なんだかとても嫌気がさします。」

4.7　不況をバネに成長しそう（青森の学生）

「憧れると言ったら大げさかもしれませんが羨ましいです。何度読み返しても前向きな若者としか思えません。彼は行動力があり、意志も強そうです。以前目指した仕事になんかたどり着けなくても、しっかりとした生き方で大人になっても成長し続ける人だと思います。彼には不況なんて関係なさそうです。それをバネに成長しそうです。」

4.8　若者にとってホントつまらない国（青森の教員）

「卒業して数年間は自分探しの旅なんですね。いま価値観が多様化しておりますから、これといった生きかたのモデルはないわけで、自分で模索して探し出すしかありません。それには、体を

動かしてやってみるしかないですね。それにしても、若者にとっては、管理の進んだ日本よりフロンティアの多いアメリカが魅力的でしょうね。閉塞感にとらわれている日本は、若者にとってホントつまらない国になってしまいましたね。彼はいいセンスをしているようです。仕事ができる、ベンーチャー経営ができるというのは、頭が切れるとか、弁がたつとか、そういうことではないようです。」

4.9　キラキラ輝く個性が随分有る（松山の教員）

「こういう学生さんを一人でも多く、私も育みたいと思います。愛媛大学の学生達の中にはキラキラ輝く個性が随分有るように思います。これを磨ける教官こそが、真の教官ではないでしょうか。学生を信じず、馬鹿呼ばわりして、偉そうぶるのは、教官失格です。愛媛大学に一人でも多く、学生諸君の未来を信じることができる教官を増やしたいものです。」

4.10　実行力と快活さ、素直で前向きな態度（東京の知人）

「岩下さんが先生にご連絡をしなかった間も先生のことが頭から離れたことはなかったのでしょうね。学生を教えるという御仕事のすばらしさを感じます。自分への信頼と夢と実行力と快活さ、素直で前向きな態度、これに健康さえあれば、可能性はきっと拓けると私たちは願っています。私の仕事を含めてですが、天職などどいうものはごくごく少数の天才たちに与えられた言葉であって、それ以外は「そうでありたい」という意思の力と「実行力と快活さ、素直で前向きな態度」で自分を築きあげプロになっていくのではないでしょうか。」

4.11　つらそうに読んで（東京の知人）

「今、近くのペンションに来ているアルバイトの慶応・経済3年の男子学生に見せました。彼は、来年から就職活動に入るわけですがつらそうに読んでいました。結局、自分の本当にしたいことがわからないようです。頭のいい子で、親にかわいがられて、あれをしても仕方がない、これをしても大したことはないと消去法で自分を正当化して、ごく当たり前の企業に就職という道に進みそうです。岩下君のようにはなりそうもありません。」

4.12　実直さ、真面目さが羨ましいかぎり（東京の知人）

「いくつの年齢になっても、本人の気力次第で可能性は100％だと思ってますが、若いというのは、時間的な余裕があるというか、損得だけでは語れないものがあるし、チャレンジしてもし失敗してもやり直せるだけのエネルギーと瞬発力がある。それともう一つの理由は、文面から察するところの彼の実直さ、真面目さです。今の不況時代に限らず、なによりも地に足をつけた地道さが夢を実現していくために一番必要なもの、一番遠回りのように見えて一番確実な近道のようなものではなかろうかと感じています。今の私がもっともほしいものを二つもお持ちの岩下さんは羨ましいかぎりです。」

4.13　日本脱出願望がふつふつと（留学経験のある元ゼミ生）

「私の方は、映画とか見る度に相変わらず日本脱出願望がふつふつと沸上がってきます。でも何かもっと確かな、それに向かって突進していけるような目標がないと、飛び出してみたところで中途半端に終わってしまうでしょうし。今のうちにChallenging なことをしておきたいという思いが拭い去れないでいるのです。つまり、今の仕事に不満はないけれど満足ではないということなのでしょうか。だから、岩下くんのお話、すごくすごく羨ましく感じました。いまは考えがまとまらないでいますが、機が熟すことがあるならば再び海外で暮らすのもいいかなと思っています。」

4.14　自分を信じられるということ（留学帰りの札幌の知人）

「自分を信じられるということは、どんな能力

よりも一番大切なことだと思います。きっと、アメリカで、そのことを学んだのではないでしょうか。アメリカは、栗原教授も周知してらっしゃると思いますが、厳しいけれども、がんばればその分評価してくれて、そして、自信をつけさせてくれる場所だと思います。やる気のある人には、魅力的な場所です。このお話しを読んで、就職が決まるまで、なにかのボランティアをしようかとも思いました。」

4.15　若い息吹・異質のものを受け入れられる社会（東京の知人）

「生き生きしていていいですね。しっかり自己認識して、自分の人生を生きていると思います。母親の敷いたレールを、ひたすら走った所謂優等生や、上役の顔色を伺うだけの社会人には無い精神の健全さがあるようです。上京しても、コネやブランドがないとチャンスがつかめないところに日本の村社会の閉塞を感じます。松本清張が小倉から上京した時も同様だったそうです。このような若い息吹・異質のものを受け入れられる社会に早くしたいですね。」

ここで紹介した感想から「愛大生の中にも日本の中の日本に該当しない人もいない訳では決してない」ということが良く分かる。また「日本の中の日本に満足せず、そこから飛び出したいという願望を持っている（もしくは持っていた）人も少なくない」ということ、しかし「そのような願望を諦めさせ、自信を奪い去るものこそまさしく日本型システムである」ことが良く分かる。

5　とても信じ難く、想像したくもなかった

最後の詰めとして、アメリカの教育システムに関する話を紹介します。1998年の11月頃、ふとした縁で、エッソ石油の社報（ESSO JAPAN1998 11・12vol.347）の中の「ソルジャーフィールドより」という記事を読む機会がありました。それは、エクソン化学からハーバード・ビジネス・スクール（HBS）へ派遣されて、2年間留学した人の壮絶な体験記でした。これはぬるま湯に浸かったような学生に活を入れるのにふさわしいと思い、早速、その記事をコピーして学生に配り、感想を求めたところ、次のような感想が寄せられた。

5.1　何だか恐ろしいというイメージ（ゼ4回生）

「HBSの学生の生活というものは、日本の大学で学ぶ私から見ると何だか恐ろしいというイメージを受けた。毎日講義の予習に明け暮れ、家族との会話も少ないといった生活は私の学生生活からは全く考えられないと思った。しかし、卒業生の言葉にあったようにHBSでの生活で得たものは、苦難を乗り切ったことによる自信で、このことがどんなにつらい仕事に遭遇してもうまくやっていける自信となることは、とてもすばらしいことだと思った。」

5.2　背筋が寒くなった（ゼミ4回生）

「HBSは、この文章を読んだ限りでは、とんでもないところだと思った。ここまで激しく目的意識を持って学ぶというのは、並大抵のことではなくすごいと思う。周りの学生と常に競争させられるシステムには、少し背筋が寒くなった。」

5.3　「すごい！」としか言いようが無い（ゼミ4回生）

「一言「すごい！」としか言いようが無いと思った。感想と言われてもあまりにも自分とはかけ離れた世界で、唖然とするしかなかった。四六時中プレッシャーの中で過ごす2年間をのりっきった事による自信は自分には想像もつかないことである。つくづく自分はぬるま湯にどっぷりつかった生活をしているなあと痛感させられた。」

5.4　とても信じ難く、想像したくもなかった（ゼミ4回生）

「とても信じ難く、想像したくもなかった。「驚いた」というのが全体の感想である。豊富な

経験と知識をもつ大勢の人たちの中で競争するということは、まさに戦場であり、当然努力は必要だと思うが、努力だけではどうにもならない世界なのではないだろうか。HBS から見れば、日本のトップクラスの大学のディスカッション、ましてや栗原ゼミのそれは、子供のお遊びに見えることだろう。」

5.5 自分とは全く関係のないことのよう（ゼミ３回生）

「思ったのは、次元というかレベルが違うということです。HBS の学生の肩書きや実績は普通じゃないし、講義という考え方も全く違っていて、あまりにも違いすぎて自分とは全く関係のないことのように感じました。おそらく「生まれ」からしてかけ離れているし、経営者になるべく勉強している人々とは、全く関係がないのだろうと思います。あと、気になったのは、それだけ優秀な学生たちを相手にする教官というのは、一体どのような人なのだろうということです。」

5.6 考え方の違い（ゼミ３回生）

「思ったのは、考え方の違いであった。HBS の学生は、たぶんずいぶん小さい頃から、HBS にいくことを目指して、もしくは自分の夢の通過点に考えていたから、その過酷なまでの学生生活にたえきれるのだと思う。目標もなくただ自分の学力に見合った学校に進み、最高学府まで歩んできた学生の中で自分のために血のにじむような思いで勉強をしようとする学生はいないと思う。それが今の日本のレジャーランド化した大学の現状ではないだろうか。」

5.7 とてもうらやましい制度（３回生）

「「成績不良として放校処分がポッカリ口を開けて待っている。」「発言ノルマをクリアするために、各生徒が発言を求めて一斉に手を挙げる姿は、日本の大学教育しか知らない者にとって正に圧倒される光景である。そんな中で自分の言いたい事を議論の流れに合わせてタイミング良く発言することは本当に骨の折れる作業である」という文章にとても驚きました。アメリカの大学少なくとも全部がこのような体制ではないにしろ、私はとてもうらやましい制度だと思います。」

5.8 まだ自分はあまい（４回生）

「正直なところ、HBS のような場所が存在することを知り「まだ自分はあまいのだな」と思いました。「あの過酷な２年間の HBS での生活を通じて得た最大の財産、それは、あの苦難を乗り切ったことによる自信だ」という一文ですが、これこそまさにその通りだと思いました。」

5.9 日本にはなじまないもの（３回生）

「可をいくつかとっただけで放校とはシビアだと思いました。恐ろしいシステムです。成績評価が厳しいということの背景には、やりなおしが比較的行いやすいという文化的背景があってこそ有効に機能すると思います。日本のように一度一般的なキャリアコースから外れるとかなりハンデをおわなくてはいけない社会で、ただ学校の成績評価を厳しくしてどんどん放校者をつくっていけば大きな問題が生じることとなるのではないでしょうか。総じて、異文化の産物であり日本にはなじまないものだと思いました。」

ここで紹介した感想から「日本には教育システムの選択がないだけでなく、日本の教育システム以外の教育システムが存在することすら教えられていない」ということが良く分かる。正に「依らしむべし、知らしむべからず」という統治思想が今でも健在のようです。また「日本の教育システムは学生に自信を植え付けることにではなく、自信を失わせることにこそ貢献している」、つまり「日本の教育システムは日本の中の日本的部分を強化することにしか向いていない」と言えるのではなかろうか。

ま と め

上で述べたように、「日本型システム」、「日本の教育システム」、「日本型システムと正反対のよ

うな若者」、「アメリカの教育システム」などに関する対話は、「自己開示を促進させる」という電子的コミュニケーションの特性を十二分に活かしてこそ得られたもので、いわば建て前を排した本音の対話と言えるものと判断できる。日本の中の日本との本音の対話から得られた結論は、「現在の日本の教育システムは日本の中の日本的部分を強化することにしか向いていない」ということであった。

学生の次の言葉が全てを物語っています。

「我慢するカエル：日本人は資本主義よりも社会主義的な特性を日本人個人個人の心の一部に、秘めているのかもしれません。社会主義的な性質から生み出されるある種の「歪み」みたいなものが、今日の日本には多く見受けられます。例えば、政治家や官僚など政府組織の癒着や制度疲労・マスメディアなどの弊害報道などはその代表格です。固定的な組織や変化をそんなに必要以上せまられない組織が、社会主義的な行動文法を取っているようです。改革はいや、社会主義のままどこまでも我慢したいということは、まるで『クルイロフ寓話集』に出てくる「我慢するカエル」の話にそっくりです。［カエルを熱湯の中に投げ込むと、驚いて飛び出した。今度は水の中に入れて、弱火にかけてその水の温度を上げていくと、「ここまで我慢したのだから、もう少し我慢できる」といって飛び出そうとはしない。そのうちカエルは本当に煮えてしまった。］」

我々大学人の使命として、カエルにぬるま湯から飛び出す勇気を与えること以外に何があるだろうか。今後は、「自己開示を促進させる」という電子的コミュニケーションの特性を更に活かして、我々日本人が不得手な「本音の対話」の必要性、重要性を再認識することに役立てたいと思っている。

謝辞　電子的コミュニケーションを介して、日本の中の日本に関する本音を開示してくれた学生あるいは学外の教員や知人達に感謝の意を表します。

お願い　拙文に関心を持って下さった方に感謝します。意見をhkuri@ll.ehime-u.ac.jpに送って頂ければ幸いです。